HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	研究室を去るにあたって
Author(s)	青柳, 謙二
Citation	独語独文学科研究年報, 20
Issue Date	1993-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25945
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_Saru.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究室を去るにあたって

青　柳　謙　二

いつか北大の研究室を去る日が来るだろうということは、しばらく前から頭では分かっていたが、現実にその日が近づいてみると、胸の内になにがしかの感懐を覚えずにはいない。教師になりたての頃には、そんなことは夢のように遠い先の話、ほとんどあり得ないことのように思っていたのだが——しかし思いがけず定年退官のその日まで学部長という職を務めさせられることになって、今は、静かに身辺を整理したり、ゆっくりと感慨にふけっている暇もない毎日を送っているが、いざこうして筆をとると、数十年の歳月が束の間のごとくにも、あるいは数限りない思い出に満たされた長い流れのようにも思えてくる。

私が文学部独文学講座に教師として席をおいたのは昭和37年（1962年）だが、そもそも北大の独文科と縁ができたのは昭和25年（1950年）旧制の北大予科から当時創設間もない文学部に入学して以来だから、もう40余年の関係になる。もっとも、その間の6年余り教養部にいたことがあるが、そこでも同じ独文科の出身だった永井義哉、小林敢一郎、新妻篤、澁谷寿一等の諸先生に囲まれていたから、ほとんど北大独文科の雰囲気の中でこの年月を過ごしたことになる。そのことの是非は今はおくとしても、良きにつけ悪しきにつけ、北大独文科が私の生活・研究を決定的に形作り、逆にまた、私の研究・教育が北大独文科のそれの一端を形成するのに与かってきたことは否めない。そのこと、とくに後者に思いを致す時、果して自分の責任を十分に果たしてきたか、自らの非力を顧みて忸怩たるものがあるが、にもかかわらず、今回同僚、同窓の諸君が、私の退官を記念して、このように立派な論文集を刊行して下さったことは、私にとって大きな慰めであり、誇りであると感じている。

私の大学生活は、上述の意味で、ほとんどすべて独文科関係者の方々に支えられてきたもので、退官にあたって、心から感謝申し上げたい。なかでも、小栗浩先生、ヘルマン・ヘッカー先生、塩谷饒先生、植木迪子先生には、永年にわたり、言い尽くせぬほどお世話になった。私が北大独文科にいささかでも貢献できたことがあるとすれば、それは先生方のご指導とご助力の賜物にほかならない。

振り返ってみれば、1972年のドイツ留学は私の研究にとって大きな転機だった。60年代からおこりつつあった文学研究の方法論議を身をもって経験したことは、それまでせいぜいInterpretationを最新の研究法としてあがめていた私にとっては、大きな驚きであった。帰国後、私は新しい方法論についての認識を不十分ながらも学生諸君に伝えようと努めたつもりである

が、その後理論は、それぞれが実を結ぶ間もなく、目まぐるしく交替し、こちらも未消化のままそのあとを追うのに忙しくて、研究上の確たる成果を生み出せぬままに過ぎてしまったことが悔やまれる。

牧歌的だった私たちの学生時代に比べれば、今の若い人達は、大量の情報に取り囲まれて、研究上はるかに大きな可能性が開かれていることは、羨ましい限りだが、同時に圧倒的な情報量に流されてしまう危険もなしとしない。テクノロジーの成果を取り入れ使いこなしながら、いたずらに情報に振り回されることなく、その中で必要なものを見定め、自分のスタンスを決めて行くには、解釈学的循環にも似た部分と全体との間の不断の操作が必要だろう。

また、国際化という点でも、今の人達は私たちよりもはるかに恵まれている。代々のLektorenや、ミュンヘン大学との交流協定締結に尽力された新妻先生のお蔭で、今では毎年数名の諸君がドイツその他へ留学しているし、日本の経済力向上で、若い学生諸君も夏休みに気軽にドイツの語学コースへ出かける時代である。私のように、遅ればせに大海を知って驚く井の中の蛙のような経験をすることは、もはやないであろう。ことに植木先生はじめ、石原先生、清水先生は、新しい国際感覚で研究・教育をされる能力を備えた方々で、その点では、北大独文科は誇るに足りると思っている。

しかし、勉強の機会や方法に関してだけではない。現在は全ての面で変化と改革の時期である。否応無しに進行していく大学改革の流れの中で、これまで私の生活の実質をなしていた独文科すなわち独語独文学専攻課程の存続も、危ぶまれる形勢である。これまで手を取り合って勉強してきた語学と文学とが、あるレベルで分離するかもしれないことは、寂しい限りであるが、同時に、そのように従来の枠組みを取り壊すことは、これまで比較的疎遠だった諸科学との新たな共同研究、学際的研究への可能性を開くことでもある。40年の間、北大独文科の枠の中に閉じこもって来たゲルマニストとしての私は、退官を前にして、大学改革の仕事に追われながら、独語学と独文学とが、新しい学問的枠組みの中でこれまでとは違う形であっても、提携しながら、それぞれ新しい知の創造のために、活性化していくことを願うのみである。